発掘調査速報展 2018 vol.1　大倉幕府周辺遺跡群・若宮大路周辺遺跡群

特 集

鎌倉の構造と境界

平成 30 年 1 月 4 日［木］～3 月 17 日［土］

鎌倉歴史文化交流館　鎌倉市扇ガ谷 1-5-1　TEL:0467-73-8501

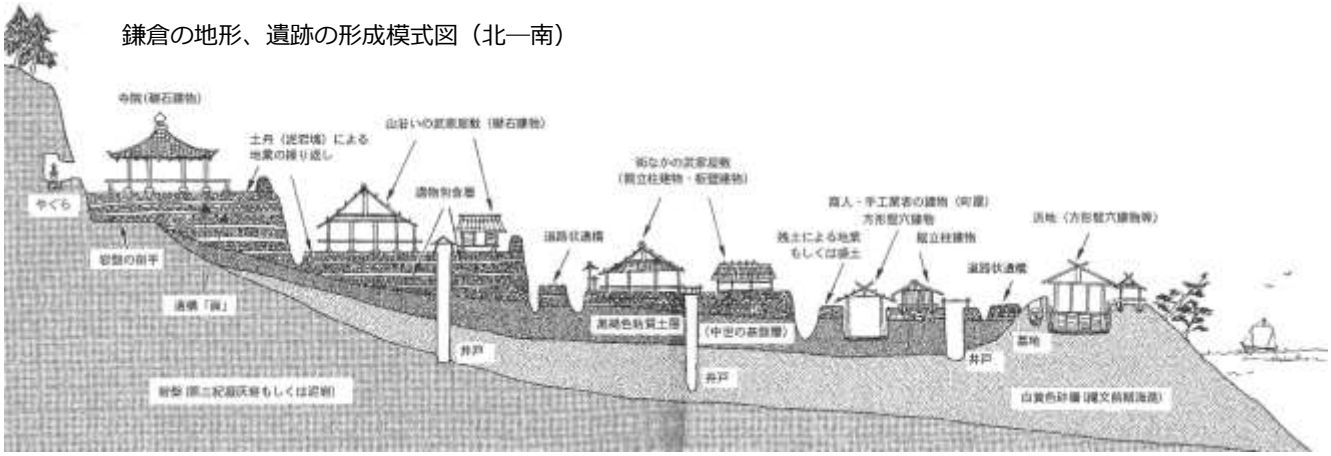
鎌倉は源頼朝が幕府を開いた地として知られていますが、中世都市として発展した鎌倉には、武士をはじめ商人や職人など多くの人々が生活していたことがわかっています。それは、発掘調査により、鎌倉の地下から昔の人々が生活していた住居の跡や当時使っていた道具など、多くの遺跡が発見されるからです。

しかし、数百年前の人々の生活を知ることができる貴重な遺跡も、現代に生きる私たちが生活していくための土木工事などで失われてしまう場合があります。このように、やむを得ず失われる遺跡について可能な限り記録を残し、未来へ引き継ぐために発掘調査は行われています。

今回の速報展では、「鎌倉の構造と境界」をテーマに、平成 28 年度に実施した発掘調査のなかから、大倉幕府周辺遺跡群（二階堂 12 番 8 地点）と、若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目 343 番 2 地点、および大町一丁目 1084 番 1・1085 番 1 地点）について、出土した遺物と関連資料により紹介いたします。

日々、鎌倉市内で行われている調査のごく一部ですが、数百年前の鎌倉に住む人々の生活を思い描きながらご覧いただければ幸いです。

鎌倉の地形、遺跡の形成模式図（北―南）



私たちの生活する地面の下には、旧石器時代から現代まで、建てられた建物の跡など、人々の生活の跡が残されています。これらを「遺跡」といい、鎌倉は、武家政権の拠点であったことから、中世（鎌倉時代～室町時代）の遺跡が多いことが特徴です。

中世の鎌倉は、当時の国内有数の人口が多いまちでした。屋敷地を作ったり、建物を建替えたりする際に、整地がたびたび行なわれました。この整地のことを「地業」と呼び、周囲の山裾を削った泥岩の塊を用いて、地面を突き固めている例が多くあります。発掘調査を進めて行くと、土の断面に地業によって出来た層（「地業面」）が何枚もの縞模様となって現れます。この縞模様の一枚一枚が、当時の人たちが生活していた地面で、順番に第１面、第２面・・・と呼んでいます。

人々が使用していた生活用具・装飾品・貨幣などの遺物は、この地業面の上や、地業面に掘られた建物の跡や井戸などの遺構から、数多く出土します。これらの発見された遺構や遺物の様子を分析することで、地業面ごとの、遺跡の性格や年代が分かります。

これまでの発掘調査の積み重ねや文献の研究から、中世の鎌倉は、平地部の北側（鶴岡八幡宮側）の山に近い地域や、谷戸と呼ばれる深い谷の中に武家屋敷や社寺が多く、低地部南側の海の近くや道路沿いには、庶民や商人・手工業者が生活する地域が広がっていたことが分かってきています。

大倉幕府周辺遺跡群（二階堂 12 番 8 地点）

当地点は永福寺跡に向かう「二階堂大路」の南側に位置します。二階堂大路の名は、『吾妻鏡』では 1231 年と 1251 年の火災記事に登場します。大路の近くには北条義時の「大倉亭」があり、その一画に第 4 代将軍となる九条頼経の仮御所があったとも考えられています。

調査では、12 世紀後半～14 世紀前半頃の遺跡が見つかりました。遺跡は上下 2 層に分けられ、下層では 12 世紀後半ごろの小規模な溝 4 条を確認しました。東西溝（遺構 2010）からは完全な形の土器皿が出土しました。中世の「かわらけ」としては最も古い特徴を備えており、平安時代末期～鎌倉時代初期に作られたと考えられます。上層でも多くの遺構を確認しました。東西溝（遺構 1036）は上幅 2m、底幅 1m、深さ 1mと規模が大きく、出土遺物の特徴から 13 世紀前半のうちに埋没したと考えられます。二階堂大路の南側溝かもしれません。それと接して並ぶ柱穴列は板塀など区画施設の痕跡と考えています。溝から離れた南側には、文献が記すように幕府要人たちの屋敷地が広がっていたのでしょうか。

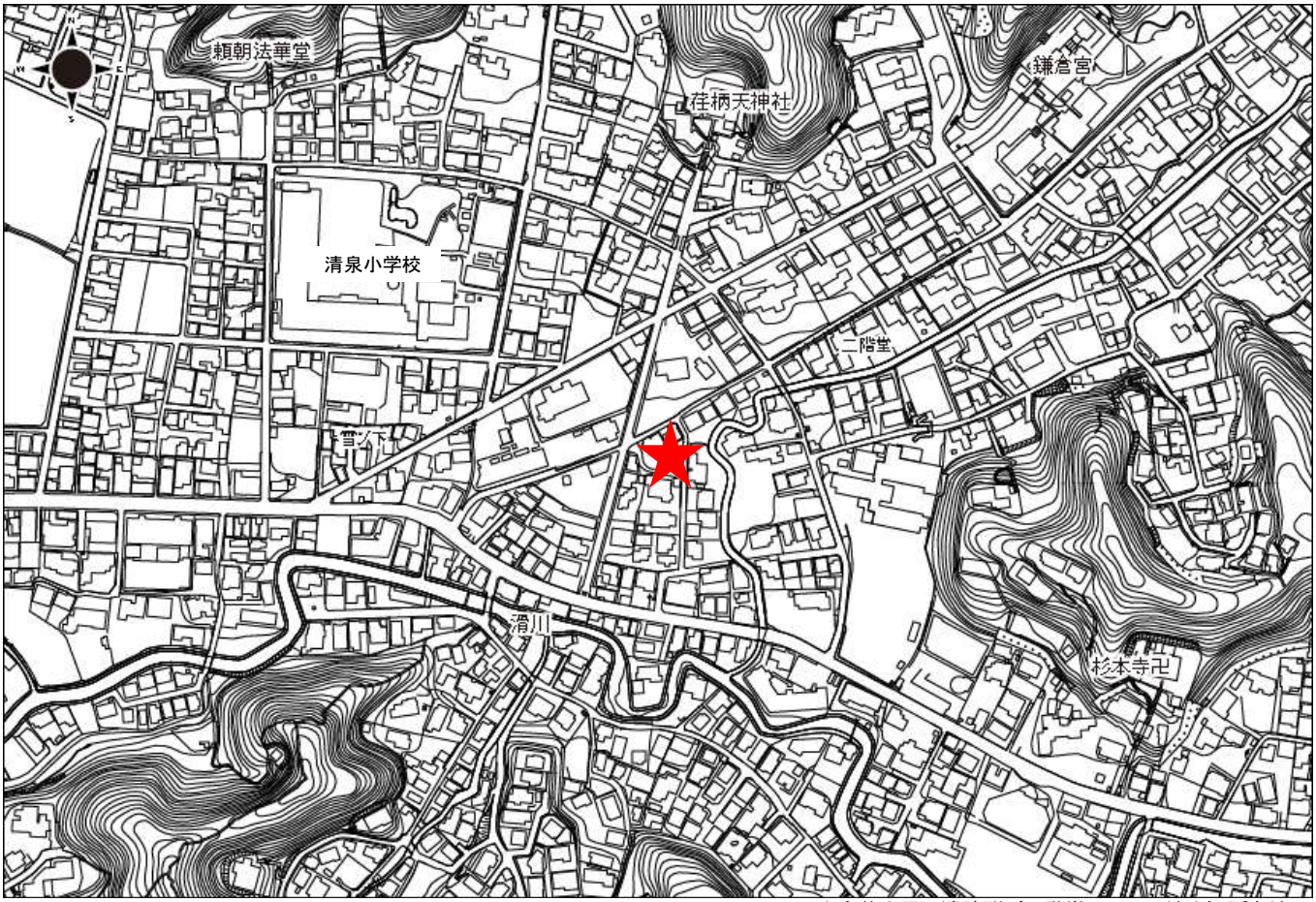
下層遺構（西半部）

上層遺構全景

東西溝拡大

かわらけ出土状況

かわらけ



大倉幕府周辺遺跡群（二階堂 12 番 8 地点）所在地

若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目 343 番 2 地点）

ここでは、中世から近世までの遺構が確認されています。中世では、土坑、礎石建物、竪穴建物などが発見されました。当該地周辺は、東側には滑川が流れ、西側には小町大路が通っています。今回発見された遺構は、礎石建物と竪穴建物といった種類の異なる建物であり、武家などの屋敷があった地域と、庶民などが住む地域の境界を考えるうえで重要な発見です。近世の遺構としては溝が発見されており、今回の調査結果は、13 世紀から 15 世紀までは屋敷や町の広がっていた場所が、近世になると異なる土地利用がなされていくことを表しています。

竪穴建物拡大

遺構全景

建物の基礎

若宮大路周辺遺跡群（小町一丁目 343 番 2 地点）所在地

若宮大路周辺遺跡群（大町一丁目 1084 番 1、1085 番 1 地点）

ここでは、中世（13 世紀～14 世紀前半）の竪穴建物を中心とする遺構群が確認されています。最も古い遺構は井戸で、13 世紀前半のものです。この井戸は、外側に薄い板材を当てがい、角材を枠に組みそれを隙間なく積み上げて井戸枠としているもので、全国的にも珍しく、鎌倉市内で初めて発見された形状のものです。この他に発見された遺構は、竪穴建物です。柱穴だけのものから、根太木(ねだぎ)を伴うものへ、さらに鎌倉石を使って造られたものへと変遷をたどることができます。本調査区周辺一帯は、中世には荷物を保管する倉庫が建ち並ぶ地域であったと考えられていますが、今回の調査結果もこれと一致するものとみることができます。

竪穴建物

竪穴建物

鎌倉時代の井戸

若宮大路周辺遺跡群（大町一丁目 1084 番 1、1085 番 1 地点）所在地